transtron

富士陸運

社員育成と安全運行に注力

トランストロン製車載器を活用

自動車輸送を手掛ける富士陸運（神奈川県川崎市川崎区）は、相澤一喜社長の「公道を職場にしている以上、事故を減らして迷惑をかけないようにするのが社会的責任」との考えのもと、社員教育と育成に注力。安全管理部の山本清部長は「ドライバーは入社後、少なくとも2か月半の研修を経たうえで、荷主メーカーの厳しい検定に合格してもらう必要がある」とし、「ことあるごとに過去の事故事例を話し、安全運行に対する意識の再確認も促している」という。

同社長は、「陸送業界は荷主がある程度固定されているため、一般貨物に比べると競争は激しくないが、1台数百万円の車両を扱うということで、輸送品質に対する荷主の要求は高い」と説明。「近年は、何か問題があった際は、荷主の担当者自らデジタコのデータをチェックされるようになってきた」とも。

同社では安全対策強化の一環で、トランストロン製のデジタコ・ドラレコ一体型車載器「DTS－C1D」を運行管理に活用。導入の経緯について同社長は、「2年前から車載器の入れ替えを模索していたが、部長からの『ドラレコ機能もぜひ』という強い要望もあり、一体型を採用した」と語る。

相澤社長（左）と山本部長

山本部長によると「導入効果は絶大」だという。「映像を見れば原因が分かるため、ドライバーの視覚に訴えることで効果的な指導を行うことができるようになった」。また、「従来のデジタコではどこで傷が付いたか分からなかったケースでも、映像を見て原因が判明したこともある」という。「現地まで行って確認し、即座に荷主に報告したところ、『そこまで調べたのか』と評価された」。また、「その日のうちにドライバー全員と共有し、他の陸送会社にも情報を流した」という。「新車を運んでいる仲間として、同じような事故が起きないように協力しあうのは当たり前のこと」。

同社長は、「車載器が集めたいろいろな角度から出てくる数値データを、これから積極的に活用していきたい」と語る。現在は、毎月、個人の評価点を出し、A－Fまでランク付けを実施。「いわば通信簿のようなもの。最初はみんな『面倒くさい、できない』という気持ちだったが、徐々に意識付けができてきた」とし、「今後は、消極的なドライバーにも光を当てられるようにし、全体の底上げをして行きたい」と意気込む。同部長も、「月初めに前月の結果を掲示し、月半ばにミーティングを行っている。月2回振り返ることで、気が緩まないようにしている」と付け加える。

使用風景

燃費は、「前年比で約5％アップ。リッター2・9キロから3・1キロに延びた」という。「もともとキャリアカーは燃費が良くないため、燃料の使用量が減って大いに助かっている」。

相澤社長は、「ドライバー同士が運転面の改善点について自主的に話し合う光景も増えている」と目を細め、「報奨制度も採り入れ、全員がAランクに近づけるように、『やるのが当たり前』という社風にしていきたい」と語る。（大西友洋）